


## 5. いじめ未然防止・不登校生支援の取組

### 1) 松原第七中学校

#### いじめ防止の取組

 **ほっとアンケート**  
『ほっ！』とできる学校をみんなの力で

2学期が始まって、1ヶ月経ちました。みなさんのここととからでは元気ですか。10月に担任の先生と2者懇談をします。短い時間ですが『勉強』『友だち』や家庭生活のことについて話をし、あなたの学校生活を豊かにしていきたいと考えています。あなたの最近の様子を教えてください。

あてはまるところに○をしてください。

	4 あてはまる	3 少しあてはまる	2 少しあてはまらない	1 あてはまらない
1 朝、気持ちよく起きられる	4	3	2	1
2 頭やお腹が痛くなることがある	4	3	2	1
3 ごはんをおいしく食べている	4	3	2	1
4 ちょっとしたことでもイライラする	4	3	2	1
5 学校でイヤだなと思うことがある	4	3	2	1
6 自分の気持ちを話せる友だちがいる	4	3	2	1
7 友だちにイヤなことをされる(言われる)	4	3	2	1
8 勉強がわからなくて困っている	4	3	2	1
9 夜、ぐっすり眠れる	4	3	2	1
10 学校に行きたくないと思ったことがある	4	3	2	1

11 自分や自分の周りの人で、気になることがあれば書いてください。

昨年9月、このようなアンケートを実施し、子どもたちの状況を把握した上で、毎年行っている担任と子どもによる「二者懇談」を1週間かけて実施した。子どもの心の状況や友人関係などについて困っていることや悩んでいることを話題にした。3年生は「進路選択・決定」の不安などを聴き、自分の将来についてのアドバイス等を担任は行った。1・2年生では、学校生活での友だち関係などが主なテーマであった。また、家庭学習の方法など指導をした。

もちろん、いじめによる被害についても聴き、子どもたちに、いじめを許さない・なくすといういじめへの学校・教員の姿勢を明確にすることができた。

#### 不登校生への支援

本校の不登校の課題は大きい。

この現状に対して、従来から担任を中心として、クラスの仲間の誘いかけ、家庭訪問や仲間づくりのイベント(ミニボーリング大会、花火をして遊ぶ会、クッキーをつくる会等)、保健室や別室での指導など、さまざまな方法で取組を進めてきた。

そのような取組の中で、学校復帰を果たした子どもたちもいる。しかし、現実には、担任や養護教諭、学年といった限られた範囲での取組になっており、学校全体の取組にしていくことが課題であった。

不登校生への取組について話し合う会議として、2003年度から週1回の不登校生等支援会議、月1回の全体会議を設置した。これらの会議は、不登校生への取組にしばった話し合いをする会議であるが、これ以外でも、『不登校は人権課題であり、進路の課題である』という共通認識のもと、学習活動部会、人権・同和教育部会、生徒指導部会の3つの専門部会でもそれぞれの観点から不登校生らへの支援について話し合うことにした。

さらに、不登校生が学級復帰に至る過程での居場所として、不登校生のための部屋＝「ほっとスペース」を設置し、家庭と学校を結ぶ拠点として位置づけた。

以下、不登校生への取組を詳述していく。

#### a) 不登校生等支援会議(週1回)

##### 構成

研究主任、こども支援コーディネーター、生徒指導主事、教務担当、人権・同和教育担当、養護教諭、学年代表、スクールカウンセラー、管理職、教育アドバイザー

##### 役割

- ・不登校生の現状と課題の把握
- ・『こころプロジェクト』の企画・運営
- ・関係諸機関との連携
- ・不登校未然防止と復帰のマニュアルづくり
- ・研修
- ・不登校生への具体的取組
- 『ほっとスペース』活用、学習支援、体験活動
- ・不登校生ケース会議
- ・松原市不登校児童・生徒等総合支援会議との連携
- ・松原市要保護児童対策地域協議会

今まで学級・学年単位で取り組まれていた不登校生の支援を、学校全体で考えていくための会議として位置づける。毎週1回、欠席の多い子どもたち一人ひとりについて、状況を交流しながら、学校復帰にむけての手だてや関係諸機関との連携などを検討し、学校全体に不登校生や配慮を必要とする子どもたちにかかわる課題を提起する会議として活動を進める。

## b) こころプロジェクト(月1回 職員会議の中で)

構成

教職員全員

〔人間関係学科の開発にむけて〕

- ・子どもたちの実態分析
- ・人間関係学科のカリキュラム作成
- ・各学年の人間関係学科の交流
- ・多様な学習方法の研究・研修と試行
- ・子どもが相談しやすい環境づくり

〔不登校生への体験・学習支援にむけて〕

- ・不登校生の現状と課題の交流
- ・不登校生への支援体制づくり
- ・ほっとスペースの運用の研究
- ・保護者支援

- ・欠席がちな子どもの早期発見、早期対応

不登校生等支援会議からの提起を受け、学校全体で不登校生一人ひとりについて論議する会議である。不登校生の状況を全員で確認することで、不登校生の課題を共通認識する。

また、各学年の人間関係学科の交流も行っており、学校全体として不登校の未然防止と支援を考える場とする。

## c) ほっとスペースでの取組

ほっとスペースとは



・不登校状態で、家にこもりがちな子どもたちが登校した時に学習できる部屋

- ・子どもたち一人ひとりに 応じた学習を支援する部屋
- ・引きこもり傾向にある不登校生が、ほっとして学習や体験活動ができる部屋
- ・研究主任が運営面での原案を出し、不登校生等支援会議で検討し、運営していく
- ほっとスペースのあり方
- ・本人の様子と気持ちを第一に
- ・当面、他の子どもたちとの接触は避ける
- カーテンを閉める
- 不登校生の在室時は室内から施錠できる
- 教員が入室する場合は、ノックして名前を伝えてから
- ・どんな学習をするかは、本人と相談しながら

- ・子どもたちが選択して取り組めるように、多様な教材を準備しておく

情報機器(PC、スキャナー、プリンター)  
テレビ、ビデオ

調理器具類、ゲーム類、パズル類

- ・担当は  
研究主任、養護教諭、生徒指導主事  
学年教員、スクールカウンセラー  
スクールサポーター 等々

## d) 2003年度から2005年度の取組から

本校での学校復帰をめざした「不登校生への支援」を取組から以下のように総括した。

### (1) 学校の変化を

意識の変化 「対策」 「支援」  
人権教育としての不登校児童生徒の支援  
アセスメント(見極め・見立て)  
「病気による欠席」へのメス  
不登校児童生徒への取組が学校教育全体への見直しへつながる

### (2) 広がりと深まりを

担任 学年・学校  
学校 小・中の連携、関係諸機関(松原市子育て支援課・子ども家庭センター・少年サポートセンター等)  
校内不登校生等支援会議 組織の整備

不登校の課題は、人権課題であり、進路の課題であること

原因追及ではなく支援へ

欠席・遅刻等の出席状況のデータを蓄積して状況分析を

チームで対応=複数のサポート

保護者への支援

校内不登校生等支援会議の重要性

校区小学校や関係諸機関との支援ネットワーク

累積欠席日数10日を契機とした取組

長期休業中の取組

自己肯定感、社会的有用感を育てる

### A 小中の連携の深化へ...未然防止は早期発見

欠席10~30日の子どもに焦点をあてた引き継ぎ

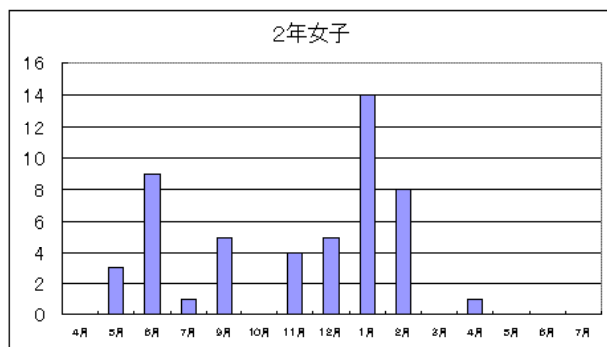
「あそび・非行型」の子どものきょうだい関係

校区の小中の合同支援会議の実施(年2回  
3学期と夏休み)

B 未然防止！ そのために  
 子どもが来なくなる学校こそ、最大の未然  
 防止・・・受容的・人権を尊重する学校  
 集団づくりの再生へ  
 早期発見早期対応は未然防止のポイント  
 欠席理由の明確でない子の把握を  
 C 保護者のソーシャルサポート

#### e) あそび・非行型の不登校生への取組

一昨年度、深夜徘徊・喫煙・飲酒・窃盗等で不登校傾向になった小学生への支援の方向性を探るケース会議を行った。松原市教育委員会、松原市子育て支援課、富田林子ども家庭センター（児童相談所）、富田林少年サポートセンター、小中学校教員の参加のもと、様々な検討を行った。本校に入学後、1学期当初は、学級・学校内で居場所づくりをめざし成果があったが、他校生とのつながりと無断外泊があり、6月・1月・2月は欠席が大幅に増加した。それ以来、好不調の波をくりかえしているが何とか学校に定着できている。家



庭からは、「体調不良」、「熱」等の理由で欠席するという連絡があるが、本人を支える大人（保護者・教員・関係機関等）のネットワークの中で、今後も支援し続ける必要のある子どもであると本校では位置づけ、取り組んでいる。また、関係諸機関とも連携し、学期に1回の定例ケース会議をもってきた。そんな支援の結果が2年生になりあらわれてきている。2年生になってからは、遅刻をしながらも1学期間は欠席が1日のみであった。相変わらず、あそび・非行型の生活パターンを続けてはいるが、関係諸機関や保護者からの支援を得ることができ、学校への定着が見えてきた。夏休み中の学級での取組にも参加し、クラスの仲間との交流もできつつある。

いじめ・不登校の未然防止に関連して  
 （生徒会がよびかけるボランティア活動）

#### a) 仮説設定として

昨年度の研究開発を通じて、いじめ・不登校の

未然防止に対しては、市民性教育（シチズンシップ教育）などを通じて、人間関係を調整していく力を育てることが必要であることを学んだ。（2007年11月18日、日本生徒指導学会における大阪樟蔭女子大学学長・日本生徒指導学会会長、森田洋司氏の講演より）そして、そんな力を育てていくためには、手法としてディベートやボランティアの活動が有効であるということ学んだ。

不登校生の未然防止にむけては、子どもどうしが受容と共感に包まれた居場所づくりを促進していく場づくりをになう子どもたちを育てる。いじめの未然防止にむけては、これに加えて、いじめの4層構造（前述、森田洋司氏による）における「仲裁者」の役割を果たせる子どもを育てる。「仲裁者」が増えていけば、それに比例していじめが減っていくということである。これまでの人間関係学科の取組を通じて育ってきたアサーティブな子どもに、市民性教育で言われている人間関係調整力をさらに身につけさせることで、「仲裁者」という役割を果たせる子どもになっていくのではないかという仮説設定をした。

仲裁者＝アサーティブな人間関係調整力  
 を身につけた子ども

これまで松原七中校区地域教育協議会が提起してきたボランティア活動に加え、本年度からは校内で子どもによる課題提起という形で、生徒会がよびかけるボランティア活動に取り組んできている。

#### b) 松原七中生徒会の取組

松原七中生徒会では、生徒会本部役員や各専門委員会（学年・生活環境・保健体育・文化図書）を中心として、あいさつ運動や地域の幼児・児童との交流の場づくり（夏の「涼もう会」、冬の「HOT×ほっと会」）などを行ってきた。



「涼もう会」



「HOT×ほっと会」

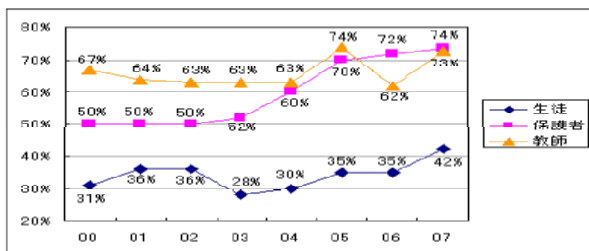
しかし、そうした活動の中で、従来から、二つの反省点があった。一つは、生徒会活動が、本部役員や各専門委員会だけのものになっていること。もう一つは、行事中心の活動になってしまい、子どもが主体的に何かを創っていくことがあまり



できていなかったことである。

また、中学校生活の中で、生徒会活動などの自主活動の面から学ぶことも多い。生徒会活動をもっとうまく活用できれば、子どもたちが成功体験や達成感をより多く味わうことができ、それが自己肯定感や社会的有用感を高めることになる。ひいては、それがいじめの未然防止につながっていくのではないかという思いがあった。

以上のことから、昨年度、生徒会アンケートをとるなどして、七中生徒会が七中生全員のものであるという意識づけを行った。従来の行事中心の生徒会から、生徒のアイデアが活かせる生徒会にしていくことをめざしてきた。その結果、昨年度の学校教育自己診断では、「生徒会活動への参加」に関するポイントが、少しだが上昇した。（下のグラフ参照）ただし、「生徒会活動は学級委員などの専門委員会の活動」という意識を払拭するまでは至らなかった。



（2000-2007 年度 学校教育自己診断）

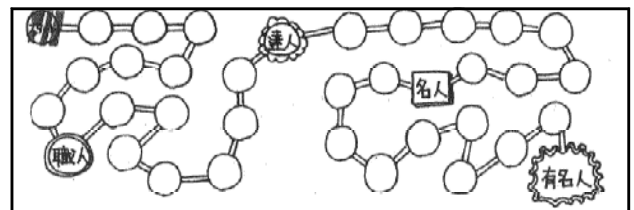
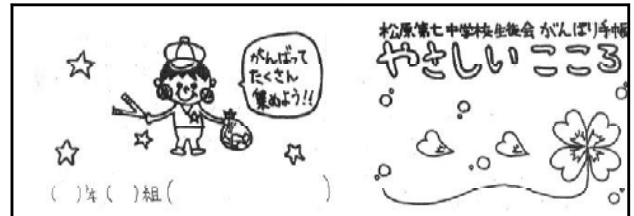
そこで、今年度、新たな試みとして、生徒会のボランティア活動をつくっていくことにした。生徒会本部役員や専門委員が呼びかけて、協力してくれる生徒を募るという形で行っている。

「七中生全員が七中生徒会のメンバー」「生徒会はみんなのためのもの」という意識を七中生全員に広げるため、すでにいくつかの生徒会ボランティア活動を実施しており、多数の子どもたちの参加があった。活動へのモチベーションも高い。また、今年度新たにデザインや名称などを募集してつくった「生徒会がんばり手帳～やさしいところ～」に、生徒会ボランティア活動をしてスタンプをためていくことに喜びと達成感を感じているようである。このような活動を継続的・定期的に行えるようにしていきたい。

今年度（1学期）のボランティア活動		参加者
1	生徒会ボランティア手帳の作成 （名称、表紙・スタンプのデザイン）	
2	グリーンキャンペーン （校庭の花壇を整備し、花を植える）	50人

3	校庭の石拾い・草抜き	77人
4	中国四川省・岩手宮城内陸地震被害への募金の準備・呼びかけ・実施	49人
5	ボランティアによるあいさつ運動	36人

（今年度〔1学期〕のボランティア活動）



（「生徒会がんばり手帳～やさしいところ～」）

また、前述の夏の「涼もう会」、冬の「HOT×ほっと会」は、PTAや地域教育協議会の協力を得ながら行っている。さらに、松原七中校区国際文化フェスタは、生徒会本部やボランティアスタッフが参加して、地域の大人と一緒にチャリティバザーや模擬店を出している。教員以外の地域の大人から、褒められたり認められたりする。これも自己肯定感や社会的有用感を高めていくことになる。さらに、こうした経験をした子どもたちが将来、地域の大人として、地域の子どもたちを育てる原動力になっていくと考えられる。そうしたあったかい地域をつくっていきたい。



## 2) 恵我小学校

### いじめへの対応

子どもたちの中に力関係でつながった事例や金銭面での関係でのつながりの事象が見られた。そのような事例を把握したときには、当事者の話し合いの中で、つらい気持ちにある子どもの気持ちを相手に響かせること、そしてそのような関係は友だちを傷つけていることに気づかせることを大切にしたい。また、学年集会等をもち、学年全体への指導とともに、自分の気持ちをみんなの前で伝えていくことを支援してきた。子ども自らが立ち上がる子どもをエンパワーさせる支援を充実させていきたい。

ただし、それ以前のこととして、子どもの実態をつかむ取組が大切である。具体的には継続的な日記指導を続けることによって、子どもの気持ちの変化に気づくことも多い。また保護者との密接な連携の中で、子どもの気になる姿や地域での人間関係での参考になる話を教えてもらったこともあった。子どもたちとの関係づくりと保護者との関係づくりが問われている。

### 不登校生への支援

校内不登校生等支援会議の中で、それまでに名前が挙がった子どもについては追跡調査を続け、個別の子どもを共有化している。その中で深刻な状況については、家庭ぐるみの支援が必要であり、松原市子育て支援課や富田林子ども家庭センターなど関係諸機関との連携を重視し、取組を進めている。「子どもの実態から」の項で前述した3人についての様子を例にあげる。

Aについては複雑な家庭環境があり、学校だけでなく子育て支援課も入った保護者への支援もしてきた。欠席が増えることによって学習がおくれることへの不安が本人の中にもあることから、担任による誘いかけをしてきた。今年度については1学期終了時点で、欠席数3日・遅刻数2回とがんばっている状況にある。少人数担当による学力不安へのフォローとともに教員との関係づくりや友だちとの関係づくりを心がけている。

Bについては昨年度、教職員で声かけをしても自分の気持ちを言えず動けなくなる事があったので、まず本人が安心できる場所を確保することと、担任をはじめ、学年の先生に話しかけをしてもらう事を行ってきた。今年度については、欠席数2日・遅刻数0回と数字としてはよくなっている。ただし、家庭環境はむしろ複雑になっており、母

親の仕事の関係で学校へ送ってくることが増えたことにより、支えられている状況といえる。学校生活アンケートでも楽しさ度の数値は学年の中でも極端に低く、またストレスの数値も極端に高いことから、日常のBの変化をすばやくキャッチし、共有化していくことが求められている。

Cについては、人間関係のことで学年集会を持ち、Cに自分の気持ちを出させることを支援してきた。そのことで若干の好転が見られていた。ただし、今年度については1学期終了時点で欠席数が10日になっており、今後もCの気持ちに寄り添い理解していくことが求められる。

AやCについては、これまでの成果として、気持ちに寄り添い理解しようとする関わりが効を奏して、学校生活アンケートでの教員との関係の項目でも今までの結果に比べて好転した。

支援として、欠席数累積10日や遅刻など気になる情報の交換を行い、課題を把握し、必要に応じて関係諸機関等との協議をしていくという流れで取り組んでいる。生活指導報告会で報告されたいじめに関わる事例において、年間欠席10日以上の子どもの対象の中にいた。その子の実態、状況を気をつけて見ていくことの大切さを再認識させられた。年間欠席10日を一つの基準にしたことで欠席状況の細かなチェックが可能となり子どもの状況を意識しやすくなった。また、そのことから子どもの課題を見つめていくということがより鮮明になった。子どもの経過観察・情報収集を続けていくことが大事であることが確認された。

## 3) 恵我南小学校

### いじめ未然防止・不登校生等支援の取組

いじめ・不登校ともにその未然防止や支援を行う上で、特に次の4点を意識した取組を行った。

#### a) 情報・意識の共有

いじめや、不登校は瞬発的に発生するというよりも長年にわたり積もったストレスや感情が表面化することに伴って発生するケースが多いと考えられる。いじめ、不登校の事象はどの子どもにも起こりうることで教員が認識し、職員会議、各部会を通して情報の収集と共有化を行い、教員全員が目ですべての子どもを見ていくという意識を持つことを大切にしている。また、子どもの数が比較的少ない点から、情報の共有化がしやすいことも恵我南小の特徴である。

### ｂ) 支援組織の充実と対象の明確化

いじめ・不登校の傾向が強い子どもを支援するための校内不登校生等支援会議を設置している。

いじめについては、いじめを認知したときの指導方法の検討や、未然防止の方法、事象をすばやく把握するための方策、児童会との連携による全校集会や啓発週間などの実施を目的とし、「生活・養護・集団づくり部」の中で論議を進めている。

不登校に関しては、今年度より不登校生等支援会議を定例で開催している。支援の対象となる子どもは、昨年度、累積欠席数が１０日以上の子ども、今年度中に欠席が１０日に達した子どもとした。また、遅刻に関しては８時３０分に教員が教室に入った時点で登校していないものを遅刻とし、遅刻の回数も含めて、不登校生等支援会議で話し合うことを確認した。

対象者の明確化によって、教員はその子どもをさらに意識し、見ていくようになった。このように、不登校生等支援会議を中心にした支援体制づくりに取り組んでいる。

### ｃ) 支援の具体化

対象の子どもについては、現状・生活実態・成果などを書き込んでいくカルテをもとに話し合いを行い、現状の報告、これまでの支援と取組の確認、今後の支援策の方針化を行っている。

子どもに対する支援

具体的には日常の教員とのコミュニケーション、その子が自分の悩みを話すことができる友達関係をつくる手助け、クラス全体の仲間づくりを通じて子どもが「行きたい」「いても安心できる」という場と人間関係の構築をめざしていく。

保護者への支援

不登校には、子ども自身による人間関係やクラスでの立場などをその原因としているものだけでなく、保護者と子どもとの関係や生活環境にその原因が由来する例も少なくない。保護者自身もストレスや悩みを抱えていることを理解し、それらを受けとめ、解決していくための支援を行う。例えば担任教師や管理職が保護者の悩みや話を聞くことで気持ちを発散させること、時にはスクールカウンセラーの紹介、関係諸機関との連絡、調整を進めていくことが支援として必要である。

学校組織として

いじめや不登校は突発的に起こるのではなく、長期にわたってのストレスや感情が積もった形の表れとも考えられる。その時、担任が「自分のクラスで起こったこと」と問題を抱え込むのではな

く、組織として問題に対応していきたい。また、経験の少なさから、保護者や子どもにどのように接していくことが支援となるのか悩んでいる教員も少なくない。担任が責任を持って問題事象に対応することは大切なことであるが、全体の問題として位置づけ、担任個人が抱え込むのではなく、校内体制として支援を行っていくために、これらの会議が存在している。

### ｄ) 経過の確認と校区連携

毎月の支援会議における報告において、会議までの期間で具体的に行った取組を報告する。また、その情報を校区不登校生等支援担当者会議として各校の担当で現状の情報交換を頻繁に行っている。兄弟関係の把握だけでなく、小学校時代の様子などをふまえた対策を講じていくことで、これらの問題をクラス、学校の問題とするのではなく校区全体の課題として意識し取り組むことができたと感じている。

## ６．保護者・地域・関係諸機関とのネットワーク

### 保護者との連携

松原七中校区では、学校園・保護者・地域・関係諸機関とのネットワークを大切にしながら教育活動を進めている。教職員・保護者・地域の人たちが協働して地域の取組をつくり上げ、子どもたちの成長を見守っていることは大きな地域の教育力となっている。そして地域で生活している大人たちが、子どもを見守り、活動の場をつくり、頑張っている姿をみつけて、ほめてもらえるような広がりができつつある。日常の行事をはじめ、地域の行事にも保護者として積極的に参加し、運営にも関わっていただいている。子どもたちの活動の様子を見守り、交流する中で、保護者同士のネットワークも広がっている。また、年間何度か行われる授業参観の中でも、人間関係学科の授業を参観し、時には保護者同士で授業を体験するなど、子どもたちの成長のために学校と連携している。様々な学校や地域の取組については、毎年「学校教育自己診断」等のアンケートで保護者の意見を知ること、より良い教育活動を進めるために活用している。

### 松原七中校区地域教育協議会との連携

松原七中校区地域教育協議会(以下地域協)は、２０００年度に立ち上げられた。ももとの松原



七中校区青少年健全育成協議会（以下、育成協）からの活動を引き継ぎながら、学校教育への支援・子育て支援の取組を強くしてきた。地域協に関わっている地域の大人たちで、子どもの頑張りをほめていこう、大人がみんなで見守っていることを伝えていこう、そのために、子どもたちの活動の場所をつくろうと、年間を通して様々な活動を行っている。

#### 松原七中校区国際文化フェスタ

地域協の行事の中で一番大きなものが、松原七中校区国際文化フェスタである。１９９５年度、当時の育成協に集う諸団体が、松原七中校区の国際理解と交流を深め、地域ネットワークづくりを目的として始めたもので、現在松原市内全中学校区で行われている校区フェスタの中でも一番早くスタートをきったのが松原七中校区である。校区の保育所・幼稚園、小学校・中学校やそのＰＴＡ



はもちろんのこと、地域の町会や子育てに関わる団体が一堂に会して行われる「地域連携のシンボル」のよう

なイベントとなっている。保育所や幼稚園、小学校の子どもたちにとってはそれぞれの取組の大きな発表の場となっている。また、中学生にとっては、スタッフとして地域の大人たちと一緒に活動する機会にもなっており、フェスタに参加する団体は、例年５０団体をこえ、参加者も５０００人を超える大きな地域の祭りとなっている。そして、そのフェスタを企画・準備する過程も、各学校園の教職員・ＰＴＡと地域の大人たちのネットワークづくりのための貴重な場であり、子どもたちにとっても保育所・幼稚園から小学校・中学校、さらに卒業生も含めた縦の交流ができる場となっている。

#### その他の行事

- ・クリーンキャンペーン（校区の清掃活動：年３回）
- ・スポーツ交流大会（小学校合同のスポーツ大会、中学生が大会運営のお手伝いのボランティア、本年度は七中のグラウンドを開放し開催）
- ・いきいきハイク（小学校合同の遠足）
- ・子育て講座（関係諸機関等から講師に来ていただき、子育てに関わる講演会）

上記のように、地域のために子どもたちが役に立つような行事や、子ども同士や子どもと地域の大人との交流



を目的とした行事、子育て支援の活動が行われている。また、地域協のネットワークの中には、中学校の「職場体験学習」の受け入れ先としても協力してくれている事業所がある。また、松原七中の生徒会行事の「涼もう会」や「HOT × ほっと会」にＰＴＡと共に協力を行っており、子どもたちからも地域のいろんな大人たちが関わってくれている様子が見える場面が多い。日常の地域協役員会の場では、毎回各校園での子どもたちの様子を交流する時間をとっており、“子どもの顔が見える活動”ができるようになってきた。また、地域協の役員経験者が地域協の幹事として役員に残ることで、これまで培ってきたネットワークづくりと活動内容を引き継いできている。

そんな中、昨年度は地域協の全役員が集う予算総会の場で、松原七中校区の幼・小・中の教職員が一緒になって、ロールプレイ（劇）で各校園の取組を紹介した。これは校区で進めている人間関係学科（あいあいタイム・ＨＲＳ）の内容を地域の方々に理解してもらい、校区の取組を知ってもらうきっかけとなった。



地域協予算総会でのロールプレイ（劇）

さらに、今年度は校区の教職員と地域協の役員が共演し、今後の取組に対する決意を地域に向けて発信することができた。



毎年、劇の内容は学校での気になるできごとやめごと、そして家庭で日常的に交わされている会話や、悩

みなどから題材を選び脚本にまとめ、それらの問題を解決していく過程での気づきや学びこそ大切であることを少なからず伝えることができた。

今後、この取組を校区で共有し、積み重ねてい

くことはかなり大変なことである。各校園の教職員が悩みながらも協力し、楽しみながらつくり上げてきている姿を見ていただけたからこそ、子どもたちの成長や今後の活動に力を貸していただける確信を得ることができた。

### 両小学校の土曜日の取組との連携

両小学校区には、土曜日の取組を中心に進める「放課後・土曜子ども体験活動推進事業」として、恵我小では「遊・遊土曜日」、恵我南小では、「エガナンサタデー」が取り組まれている。ここにも、各校区の町会や松原市の青少年指導委員や体育指導員、そして地域の諸団体が日常の土曜日の子どもの居場所づくりを担ってくれている。

### 関係諸機関との連携

- ・スクールカウンセラー  
児童・生徒や保護者のカウンセリングの場として小学校は月に1回、中学校は毎週、巡回しカウンセリングを行っている。
- ・松原市教育支援センター（チャレンジルーム）  
学校以外の居場所づくりとして、松原青少年会館に開設、担当者が派遣されている。
- ・松原市子育て支援課  
配慮の必要な家庭や子どもについて、継続的に連絡を取りながらサポートしている。
- ・富田林子ども家庭センター  
ここ数年間に数件の具体的な事例について連携してきた。
- ・富田林少年サポートセンター  
小学校高学年について「非行防止教室」を開催してもらっている。
- ・松原警察署生活安全課少年係  
児童・生徒の生活指導の担当者との日常的な連携や、地域協での防犯教室など、情報交換を行っている。
- ・松原第7保育所・ピヨピヨ保育園  
松原七校区中フェスタや学校行事への参加など、交流する場が定着してきた。

このように、松原七中校区には、各校園、地域、関係諸機関による横のつながりと、保育所・幼稚園・小学校・中学校という縦のつながりがある。このネットワークの中で、子どもたちの成長をさまざまな角度から支援し、さらに相互のつながりを深めることを大切にしながら活動が進められている。



地域協ボウリング大会



地域協クリーンキャンペーン